

ナラ枯れ後の植生回復の現状と今後

～実生保護 1 年後の現状報告から～

京都府立大学 長島啓子

はじめに

宝ヶ池の森は今、マツ枯れやナラ枯れにより高木性樹種が減少しソヨゴなどの低木からなる低質林が増加している。またシカにより次世代の森林を形成する稚樹や実生が食べられるとともに、現在ある低木も減少する傾向にある。このため、2013年12月には宝ヶ池連続学習会で森林再生に向け、市民のご協力を得て、ナラ枯れ跡地において落ち葉掻きをし、実生の発生を促進すると共に、防鹿ネットを張り、シカの食害から守る取り組みを行った。京都府立大学森林計画学研究室では、その後の実生の発生状況を1年間モニタリングしてきた。本日の宝ヶ池座談会では、そのモニタリングで得られた実生の個体数、種数の発生状況を報告する。また、発生状況の違いをプロットの斜面における位置、光環境や土壌硬度、周辺植生との関係から検討する。

方法

桜の森の西向き斜面に35m×35m、東向き斜面に25m×20mの方形区を設定した上で、斜面上部、中部、下部に落ち葉掻きをした後に、1.6m×1.6mのプロットを合計16プロット設置した。半数のプロットは防鹿網を設置した調査区、残り半数は防鹿網を設置していない対象区となっている。それぞれのプロットにおいて4月から2週間ごとに発生した実生の樹種と個体数を記録するとともに、食害などでなくなった個体についても記録をした。また、各プロットの光環境を把握するために全天空写真による撮影を行うとともに、土壌硬度調査も実施した。また、西向き斜面、東向き斜面のナラ枯れ後の林分構造を把握するために毎木調査（胸高直径、樹高、樹種）も実施した。さらに、発生した実生の樹種と周辺植生との関係を調べるため、プロットから5mの範囲内にある樹木および、方形区周辺10mの範囲に見られる樹種との類似度を算出した。

結果

毎木調査の結果、西向き斜面では上層に生残したコナラ、アベマキ、クリ、下層にコバノミツバツツジが見られた。東向き斜面では上層に生残したコナラ、アカマツが、下層にサカキ、リョウブが見られた。実生は、西向き斜面、東向き斜面ともに調査区の方が対象区より個体数が多くみられたが、種数は個体数ほど大きな差は見られなかった。また、双方ともに斜面上部、中部、下部と斜面の下方にいくに従い個体数が増加する傾向がみられた。西向き斜面では下部に行くほど光環境が良い傾向が見られたが、東向き斜面では光環境との関係は不明瞭であった。また、両斜面ともに実生の個体数および種数と土壌硬度との間には明確な関係はみられなかった。西向き斜面ではソヨゴやコシアブラなどの実生が多い一方で、東向き斜面ではアカマツとリョウブが多かった。周辺植生との類似性はいずれも低かったが、それぞれのプロットには母樹となると思われる同樹種が観察されているので、周辺からの種子供給の可能性が示唆される。これらの関係をより明確にするために、更なる研究を継続していきたい。